

『義経記』と『平家物語』との比較研究

— 義 経 を 中 心 に —

吉 野 幸 子

はじめに

義経の伝記は数々あるが、そのほとんどは史実としては不確かなものである。伝記はいうまでもなく人物の一代記のことである。普通は正確な史実にもとづいて書かれる。しかし史料が何であるかにかかわらずその生涯を書き記したものは伝記なのであるから、実録による一代記だけでなく、物語や伝説による一代記もやはり伝記のうちである。義経の場合、あえて史実から離れたところから逆に史実との距離を測り直して義経伝記の展開をあつげようとする意図があり、それは歴史的事実そのままの義経よりも、むしろ伝説化された義経の方が、ほんとうに義経らしい英雄になっていると高橋富雄氏は述べておられる。

伝記の根本史料に、原典としてまず第一に『義経記』をあげ、ついで『平家物語』があげられている。前者は、貴公子のように描かれ、後者は荒々しい武将として描かれている。それは全く同一人物とは思えないくらいである。なぜこのような違いがあるのか、筆者はそこに非常に興味をもったのである。

幼い頃は、誰でも、あのお伽話のような牛若丸の話から義経をか

わいらしい稚児に想像するだろう。しかし、実録による義経は美男子などとは全く書かれていない。ではなぜ美化された義経が何百年もの間いい伝えられているのだろうか。『平家物語』における義経よりも『義経記』における義経が伝説化され、有名なのはなぜなのだろうか。この両者を、いろんな角度から比較し、研究していこうと思う。

引用文は、平家物語については、『日本古典文学大系 平家物語 下』、義経記については、『日本古典文学全集 義経記』に拠った。

一

まず、『義経記』と『平家物語』の成立に関して、述べてみよう。
義経記

成立時期は、鎌倉時代とするものと室町時代にはいつてからとするものと二つに大別されるが、室町初・中期の成立とするのはほぼ定説化している。角川源義氏は、義経の北国落ちに登場する北の方が、琵琶語りの盲人たちと関係の深い久我家の出身であること、その久我家が盲人の支配権を持つようになったのが室町期であることから、これを成立時期推定の手がかりとされている。

作者については、成立時期以上に知られていることが少ないが、島津久基氏は、作者像として、

- (1) 主作者は一人なるべきこと（流布の間の改変は蒙ったとしても）。
- (2) 義経に対する熱烈な同情者であること。
- (3) 義経伝記を集録しようとする意志を有する人らしいこと。
- (4) 小説の構想の組成に全く無関心ではない人であることが感ぜられること。
- (5) 仏者よりもむしろ儒教的教訓主義の人らしいこと。

(6) 東国人を卑しめ都人の優美風流を喜ぶ人、公家者ならずとも少なくとも都の人なるべきこと。

の六つの条件をあげておられる。しかし、最終的には特定の人物によってまとめられたとはいえず、それ以前に個々の物語としての成長があったに違いない。一般には、中央の知識人の手によって記載文学化されたといわれている。

また柳田国男氏は、『義経記』は各部分の作者や産地をそれぞれ別に、合資会社のような持寄世帯で、北国下りの地理が特にくわしいこと、山伏の作法がよく記されていること、平泉における亀井兄弟の活躍が特に華やかに描かれていることなどから、この物語の主要部分は奥州系の語りであつたろうという。つまり、みちのくの住民たちの家を愛し祖先を思慕する情と、この地方にひろがっていた熊野信仰とを背景に、多くの伶俐な座頭の坊サマによって培われた語り京都にもって出て恥ずかしくないほどまでに成熟し、これが『義経記』成立の主要条件になつたといわれている。

平家物語

制作時期はあまり明らかではないが、応永書写延慶本『平家物語』は、その奥書を信ずれば、延慶三（一三二〇）年以前に存したことになるが、その他の諸系統の中の本も、およそ藤原將軍の時代には成立しており、承久の乱後数十年の間に作られたと考えられる。原作は、承久の乱以前、後鳥羽院の時代にできただろうと漠然と推測されているのが現状である。

作者は、一般に信濃前司行長とされている。しかし、もとは民間の吟遊詩人ともいふべき盲目法師によって、広められたのである。

この物語の成つた中世は、言わば変革の時代であつた。こういう時代には、新旧の要素が入りまじり、からみあうのが常である。つまり貴族出身者で宗教界の大御所であつた慈円の庇護のもとに、末流公家の隠遁文学者と東国出身の庶民・芸能人とが結び、そういう結びつきのうちに成立したもののなのである。

以上、成立に関してのべたわけだが、両者とも成立時期が確かではない。が、『義経記』が『平家物語』よりも後に成つたのは明らかであり、そして両方とも何らかのかたちで語られた「語りもの文芸」であつたらしい。

『平家物語』は、入道相国清盛・旭將軍義仲・九郎判官義経の三人を中心とする三部に分けられるが、この三人のうち清盛・義仲がともに「盛者必衰の理」の体現者として、その栄華と没落を強く印象づけているのに対し、ひとり義経のみは、いかなるわけかその生い立ちと末路とを明らかにしていない。宇治川の合戦にはじまり、一の谷・屋島を経て壇の浦の決戦にいたるその合戦記ではなやか

さの割には、義経は知られざる謎の部分があまりにも多いといわねばならない。

なぜなのだろうか。その理由は、頼朝治下の鎌倉幕府とそれを引き継いだ北条政権のもとで、義経の悲運を語ることが、頼朝への非難、幕府への批判につながるものとしてタブー化され、表沙汰にすることがはばかられたという事情があったと考えられている。

しかし、こうした制約が加えられるほど、逆に「判官びいき」の庶民感情がたかまっていくのも自然で、義経に関する未知の部分の明らかにしたいとの願いも強く、そうした英雄に対する大衆の感動と願望が、やがてさまざまな義経伝説を産み出させていくことになったのである。

高橋富雄氏は、『義経記』という作品の成り立ちについて、「歴史の重みから伝記を物語るのになしに、歴史への願いからその伝記を物語ろうとする」もの、と規定されているが、鎌倉幕府をはばかりながら民間に語りひろめられたさまざまな義経物語は、しだいに国民文学としての結晶を見せるようになる。そして室町時代に入るとともに、これまでの制約を解かれ、はなやかな開花期をむかえることになったものらしい。

『義経記』は『平家物語』の義経に関する叙述をうけ、その描き足りなかった部分を、あたかも補足するようなかたちで成立したものである。故に、世盛りのもつともはなやかな武将としての活躍期を、『平家物語』にゆだね、『義経記』はその前後の不遇な生い立ちと悲劇的な末路に筆を費やしたのである。

二

『平家物語』における、宇治川の義経初登場の姿は、敏捷果敢、快進撃という言葉そのままの颯爽たる青年武将のイメージを浮きあがらせ、一の谷、屋島、壇ノ浦などの合戦ぶりはみごとである。

義経は常に周到緻密な予備調査と準備、そして迅速果敢な行動をしている。「坂落」における一の谷の合戦では、山崎・水無瀬・昆陽野・生田と進んできた範頼の五万の正面軍は、堅固な防備にはばまれて、一時はむしろ平家に有利であったのに、屏風のように切り立った裏手の山から突如として源氏の人馬が踊り込み、所要所要に火がかけられ、平家は一瞬にして大混乱におちいり、一の谷城はあつてなくおちたのである。この敵の予想もし得ないことをやってのけた奇襲作戦はすばらしい。また屋島では、暴風雨の気配を感じさせる危険な海上をむしろ好機と判断して、わずかな手兵を引きつれさつと渡り、平家を海上に遁走させた。この一見無謀な渡海作戦が、やはり戦況を有利に展開させる契機となった。

この屋島の戦いには有名な弓流しがある。深入りしすぎて、船に乗った平軍からあやうく熊手でかぶとのしころを押えられそうになった。驚いて近寄った味方のためによく熊手をうち払うことができたが、どうした拍子か自分の弓を水中へおとしてしまった。義経が馬の上から鞭でその弓を拾おうと苦心しているのので味方の兵が、「弓など捨てたまえ」と言ったが聞かずついに苦心の末、これを拾った。あとで、あんな弓一本になぜ危険をかえりみなかったの

かとなじると、「おれの貧弱な弓が敵の手にわたって笑ひ者にされ
たくなかったからだ」と答え、部下たちを感動させたという。これ
は義経が名譽を重んずる武士だったことを伝える佳話として昔から
名高い。最後に、平家にとどめを刺した壇ノ浦合戦であるが、彼は
部下に命じて敵の戦闘員には目もくれず兵船をあやつる水手・楳取
のみを目標に矢を射かけさせた。この奇策は見事に成功したのであ
る。また、この合戦では例の八艘飛びというすばやい身のこなしを
みせている。

以上、見てきたところを整理してみると、『平家物語』は、義経
を生来の敏捷さにも言わせて、神出鬼没、速戦即決を得意とした
武将として描いている。その戦闘ぶりの細部にわたっては、『平家
物語』一流の誇張もあり、理想化もあるだろう。しかし、大体にお
いて、その人間像は、実際の義経像とそれほど大きなへだたりはな
いといわれている。

それは、強く、明るく、かげりのない、頭のきれる戦士の像なの
である。

三

『義経記』と『平家物語』を読みくらべた時、たしかにもっとも
印象にのこるのは、判官義経その人の描き方で、その相貌は同一人
物でありながら、まるで別人であるかのように違ったものだという
事だ。

まず『平家物語』においての義経の描写だが、

九郎は色しろうせい、ちいさきが、むかばのことにさしいでてし
かんなるぞ。たゞし直垂と鎧をつねにきかふなれば、き(ッ)と
見わけがたかん也。(鶏合壇浦合戦、下三三〇頁)

とある。これは敵方の侍中次郎兵衛盛嗣の口を通して語られた言
葉である。この意味は、「九郎は色白くせいの低い男だが、前歯が
特に出てはつきりわかるそうぞ。ただし直垂と鎧をいつも着替え
るそうだから、すぐには見分けにくいということだ」である。

！このように決して美貌とはされていない。これに反して『義経
記』では、

南都、山門までも聞こえたる稚児の、一昨日鞍馬を出でたること
なれば、きわめて色白く鉄漿黒に、薄化粧して眉細くつくりて衣
ひきかづき給ひたりければ、姿松浦佐用姫が領巾振る山に年を経
て、寝乱れ髪の際より、乱れて見ゆる黛、鶯の羽風にも乱れぬべ
くも見え給ふ。玄宗皇帝の時ならば、楊貴妃とも謂ひつべし。漢
の武帝の世なりせば、李夫人かとも疑はる。(巻二、八二頁)
という、たぐいまれな美貌の持ち主として形象化されている。

前にあげた『平家物語』の一節において、平家は義経に敗走を余
儀なくされたため、せめてもの腹いせに言ったものであり、この言
葉にはどこことなく本当らしきがある。

戦場にいる指揮官は、いつなんどき不意の刺客に襲われないとも
限らなかつた。このため義経も替え玉を用意したり、変装したりし
て、敵の目をくらます工夫をしていたに違いない。しかも出っ歯で
背が低いという。出っ歯も背が低いのもいづれも精悍さにつながる
もので、従って、ずんぐりむつくりしたエネルギーな風貌が実

際義経像だったのだろうと思われる。二でものべたが、確かに『平家物語』に語られる義経の行動は俊敏果断であり、胸のすくような速攻と奇襲によって、あたるところ敵なしといった状態である。風采のあがらぬ貧弱な小男がひとたび戦陣に赴くとき、鬼神をもひしぐ活躍をするということがこの本における義経の戦場の英雄としての描き方だったのだ。故に『平家物語』において義経の容貌は醜くても別にかまわないのである。

しかし、この一節についてももう一つの解釈のしかたがある。壇ノ浦合戦では、勝利する側よりも、今日を限りと戦う敗者の方が、英雄物語のこまごまをいくつもあわれ深くつづっている。

世の中を今はこれまでと覚悟した人は、いざれおとらず崇高であって、勝者源氏は、ここでは思い切って引き立て役にまわされ、義経を、「色白うせいちいさが……」とし、平氏に対するはなむけのつもりでかかれているというのである。どちらの解釈にしても、醜くかかれているのは事実なのである。

それに反して、『義経記』では、女装すれば楊貴妃に見まごうといわれるまでの美貌の貴公子に仕立てあげられている。それは、『義経記』全巻の目的が、大衆が心ゆくまで讚美し詠嘆することのできる英雄理念の造型にあるからだ。牛若は、生まれながらにして天下に主たるべき器でなければならぬ。目のあたりに武芸を天下に示し、世人の耳目をおどろかした名将軍、それが義経である。だとすれば、その幼少物語もまた、聞いておどろき、見ておどろく少年英雄談でなければならぬのである。とにかく何をやっても日本一でなければこの物語の規格に合わないのである。故に、義経は日

本一の美男子でなければいけないのだ。

『平家物語』から『義経記』へかけての以上のような義経像の面貌は、いったい如何に理解すればよいのだろうか。高橋富雄氏はこれを「義経において、理想的な英雄を見ようとする物語精神が、武将物語だけでは満足できず、ちょうど郎党たちに武将の役目を譲って非役になった義経に、もう一つの英雄類型たる王朝貴公子の役を割りあて、そのさいなまれる流離の物語として、悲劇をさらに深めようとする構成に変わってきた」結果としてとらえられているが、『平家物語』を通じて一般化している義経像とは違った側面を『義経記』の中に求めようとする民衆感情がこのような義経像をつくりあげたのだろう。

四

一 の最後にも述べたが、『義経記』は『平家物語』を補足するようなかたちで成立したのだから、『義経記』には、『平家物語』のよう源平合戦の場面はなく、

かくて御曹司戦の手合せに海道に戦に打ち勝って、同じく寿永三年に上洛して、平家を追い落とし、一の谷、八島、壇ノ浦、見参に入りて、去ぬる元暦元日に檢非違使五位尉になり給ふ。(巻四、一九三頁)

というわずかな数行の簡単な叙述でかたづけられているにすぎない。その点では、一代記としてもまったく変則的なものといわねばならないが、『平家物語』が公人としての義経の活躍にスポットを

当てているのに対し、『義経記』は私人としての側面をクローズアップしているわけで、そこに、歴史を踏まえながら必ずしもそれに制約されず、自由に虚構的世界をくりひろげてみせる独自性を見ることが出来る。しかし両者に共通した事件が全くないわけではない。『腰越状』“堀川夜討”“判官都落”などは共通した場面である。

『腰越状』では内容はさして変わらないのだが、『堀川夜討』“判官都落”に関しては多少の違いがある。まず、『堀川夜討』であるが、ここで静の機転によって義経は暗殺をまぬがれ、逆に土佐房は六条河原で殺されたことは同じだが、家来の活躍は随分違う。

『平家物語』では、江田源三、熊井太郎、武蔵房弁慶などがまたたく間に土佐房をほろぼしているのだが、『義経記』では、大活躍をしているのは身分の低い下部喜三太という人物である。ここには成立時期の背景が関係していることが考えられる。この下層の従党の姿が活写されているところに、土一揆の行なわれる社会に生まれた軍記物としての、『義経記』の独得の世界ができたのである。

次に『判官都落』の場面であるが、大物浦での遭難で『平家物語』では、

都よりあひ具したりける女房達十餘人、住吉の浦に捨をきたりければ、松の下、まさごのうへに袴ふみしだき、袖をかたしいて泣ふしたりけるを、住吉神官共憐んで、みな京へぞ送りける。(判官都落、下三九一頁)

とあるが、『義経記』では、

志は切なれども、かくては叶ふまじとて、皆方々へぞ送られけ

る。平大納言の姫君は、駿河次郎承りて送り奉る。久我大臣殿の姫君をば、喜三太が送り奉る。その余の人々は、縁々に付けてぞ送り給ひける。(巻四、二五三頁)

とある。つまり、前者では野性的で強く鋭い戦士のみ描くことに専念しているため、女性に対する細やかな心づかいなど微塵もあつてはならないのである。又後者では、貴公子として描くことを主としていたため、女性に対してもやさしい心づかいを持ったナイーブな好青年でないと思われないのである。

こういった点から、両者には以上のような相違が生じたのである。

五

『義経記』は主従愛の説話群だといわれている。義経対弁慶、義経対佐藤嗣信、忠信などの主従愛である。この主従関係が他のどの本よりも詳しくあらわされているのは、封建社会が一応の成立を終え、そこにすでに一つの道義化した形において主従の道が取りあげられることを望まれた時代に産まれたものであるからだと考えられている。

富倉徳次郎氏は、封建社会は、本来は主が従に土地を給与することによって、その実生活を経済的に保証し、それに対して従が主の社会的地位を守るべく絶対的奉仕を約束するという、半物質的、半精神的な主従の関係によって成立するものなのである。物質的な恩給という経済的行為と御奉公という精神的奉仕と、この二つのもの

によつて結ばれる二人の人間の関係なのである。それを、今や主従愛という、一つの人間の絶対的な愛情関係にまで高め、道義化したものの造型、これが『義経記』の語る義経的な主従愛なのであると言われている。

彼には、いわゆる、地縁関係から結ばれる従者や、土地を与えることによつて結ばれる一般の主従関係の部下はない。それは個人的な関係ないし、人間的な結びつきによつて結ばれた主従なのである。伊勢三郎義盛は、彼が若き日、奥州下向の時、上野国の板鼻で偶然結ばれた主従であり、弁慶は、京の五条の橋の上で対戦し、義経に打ち倒されたことから家来となった。また、佐藤嗣信、忠信の兄弟は、秀衡の紹介による主従関係であり、鷲尾三郎義久は、義経が鴨越えの路の案内者を求めた時、その地に住む獵師、鷲尾庄司武久の子であったが、道案内役をした縁で、義経の家来となったのである。どの人もおとらずにばな家来として語られている。しかし、その中でも特に力をこめて語られているのは武蔵府弁慶である。

『義経記』巻三のほとんどは弁慶物語に割かれている。高橋富雄氏は、ありうるもつとも理想的な英雄性をまず義経で確立し、それを超人性、神秘性はそのままに、反対のがわにたおして裏がえした義経を、弁慶という名前で造型したのだと言われている。だから弁慶というのが、本来弁慶をいう名前で義経であったとすれば、義経という名前で義経の分野がそれだけ狭くなってくるのは当然なのである。

前半では、判官義経中心に物語が展開しており、義経は文字どおり主人公であったのに、後半では義経を美化する傾向が強くなり、

につれ義経その人よりも、それをとり巻く人々の方へと物語の比重がかかっている。そして弁慶以下の従者たちの活躍があざやかになればなるほど、逆境の立場にいる英雄は、人々の同情をひく。義経は従者たちの陰にかくれ、無力な貴公子に変貌をとげているのである。だから、郎等たちに武将の役目を譲って非役になった義経に、もう一つの英雄類型たる王朝貴公子の役を割りあて悲劇を深めようとしているのである。吉野に静を捨てかねた時の義経は、

判官思ひ切り給ふ時は、静思ひきらず。静思ひ切る時は、判官思ひきり給はず。たがひに行きもやらず、帰りては行き、ゆきては帰りし給ひけり。(巻五、二六二頁)

とあるように、まさに王朝貴公子である。

また五巻の終わりに、主従愛がよくあらわされているところがあつた。それは、衆従の襲撃の咄嗟の間に持参したわずかな餅を空腹の主従に分け合う場面である。義経は、自分が持参した二十個の餅を従者に分けあたえ、従者もまた、それを毛よき鎧や骨強き馬の恩賞をいただいたような思いをして、涙ながら餅をありがたいただいている。まことに心温まるエピソードである。ここは、没落の悲運の中に固く結ばれる主従の愛が強調されている。

平泉で死んだと書いた『義経記』はこの最期を描写することによつて悟達の境に入る悲劇の英雄と、それに殉ずる従者たちの忠誠を訴えねばならない。それ故、鎧までも朱に塗りこめて義経の前に駆け寄り、

「君御先立ち候はば、死出の山にて御待ち候へ。弁慶先立ち参らせ候はば、三途の川にて待ち参らせん。」

と、弁慶が別離の言葉をのべる。それに対して法華経を読んでいた義経が大きくならずき、

「死なば一所とこそ契りしに」

と、つぶやく主従の男対男の愛で「物語」を結実させているのである。

六

「判官びいき」という言葉があるが、これは、正しくてしかも世にいれられない弱者に対する同情を、義経について典型化した国民感情である。

高橋富雄氏は、『義経記』は判官物と呼ばれる義経文学の特殊なジャンルをつくりだし判官びいきと呼ばれる特殊な義経崇拜を文学の理想に定めたことに意義があると論じられているように、後世の判官物といわれる傾向文学は、その型と方向をこの『義経記』で定められたといつてよい。そして義経の英雄像もここで国民的な確定を見ることができるといえる。

義経は、源氏の没落の悲運のまっただ中に生を受け、苦難の中に生立ち、兄頼朝の挙兵とともにその旗の下に馳せ参じ、鎌倉殿の代官として源平合戦の晴れ舞台に登場し、めざましい活躍を見せるが、平家打倒の宿願を果たしたよるこびも東の間で、やがて兄頼朝との不和から京都を落ち、みじめな潜伏と放浪の生活を重ねた末、ひそかに身を寄せた奥羽の地で、頼りにしていた藤原一族に攻められ、三十一歳の若さであえない最期をとげる。その生涯は、いかにも乱世に生きた風雲児らしく波瀾にみちており、人々の夢をかき

たてるのに十分なものがあつたし、功多くして報いられることのない悲劇的な運命に対する同情が、いわゆる「判官びいき」の感情となつて、義経に対する不思議な人気をつくり上げることになつたものと思われる。

『平家物語』においての「判官びいき」は義経の英雄化といふかたちであらわれており多くのスペースを割いてその武将としての活躍ぶりをクローズアップし、輝かしい合戦絵巻をくりひろげていく。しかし、この判官びいきは、古典的であり、本来の判官びいきとは違う。それは、

木曾な（）どにはに、以外に京なれてはありしかども、平家のなかのありくづよりも猶おとれり。（藤戸、下二九七頁）

というふうに、冷静に判断して、感情におぼれてしまうことのないことからいえる。故に『平家物語』における義経びいきは、単なる同情である。同情は判官びいきにならないのである。

『義経記』は、軍記物でありながら、合戦の場面が、実に明るく描かれている。『義経記』には夢がある。義経はその時代の大衆によって歴史に夢を持ち込む英雄として選択された。そして、それを不遇を悲しむ同情から手放しに明るい英雄をつくっていったのである。そして『義経記』が作品としてまとまりをみせ、その語りがくりひろげられていくにつれ人々の関心がますます深まり、「判官びいき」の感情がいつそうたかめられていったのである。

そして、多くの判官ものが生まれ、虚像の義経が、大衆が望んでいる理想の義経が、時代を越えて、現在に至るまで根をはって生き続けているのである。

おわりに

以上、義経について考察を進めた結果、本当の義経は、『平家物語』の描写が真実に近いということがわかった。しかし、私は義経が決して美男子ではなかったとしても、その人の生涯に魅力を感じるし、戦いにおける武勇と判断力には敬意を表する。日本人は、いつも義経について白面美貌の貴公子というイメージを抱いてきたようだ。そして多くの人々がそれは真の義経ではないということを経史の側からする義経伝記の本を読み知ったとしても、伝説の義経はおだやかにひっこむという空気には少しもなっていない。

私は、伝説の義経は伝説の義経として存在し、史実の義経も又存在しており、貴公子でなく粗雑な義経がいたとしても、人々の心の中ではそれを否定し、義経は絶対にこうでなくてはいけない、完璧な、そして美しい人間像でなくてはいけないという思いが、史実の義経を消しているのだと思う。そして、これからも伝説の義経は史実の義経を圧倒してますますふくれあがり、判官びいきの心情は人々の心から決して離れることがないと思うのである。

古来、桜の花の清らかさを愛する日本人は、頼朝のやり口をきらい、ぱっと咲いてぱっと消えていった義経に、無限の愛情と同情を寄せ続けていくだろう。

「判官びいき」から生まれた『義経記』は数々の判官ものの文芸を生みだした。『義経記』は義経を主人公とした単なる物語にすぎない。しかし多くの人々にいろんな夢やロマンを与えてきた。大衆が産んだ大衆の物語、この『義経記』の義経は、滅び去ることなく

永遠に語りつがれるだろう。

筆者はこの「義経」を研究する間、義経をかこむ人々の存在を興味深く思った。弁慶、忠信、静御前などこれらの人々も大衆によって虚像化されてきた人物である。これらの人物の伝説化についても今後研究してみたいと思っている。末筆ながら、先学の学恩に負うところが大きかったことを付記して感謝の意を表したい。

参考文献

- | | |
|----------------------|--------|
| 高木他『平家物語下』（日本古典文学大系） | 岩波書店 |
| 市古貞次『平家物語』（日本古典文学全集） | 小学館 |
| 富倉徳次郎『平家物語』（NHKブックス） | NHK |
| 松永伍一『平家伝説』 | 中央公論社 |
| 上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』 | 講談社 |
| 山田昭全『平家物語の人びと』 | 新人物往来社 |
| 梶原正昭『義経記』 | 小学館 |
| 高橋富雄『義経伝説』 | 中央公論社 |
| 高柳光寿『源平の盛衰』 | 人物往来社 |
| 渡辺保『源家三代』 | 人物往来社 |

〔評〕

細部にわたってよく考察していると思う。今後は、義経を形象化している作品自体の性格についての研究が課題として残るであろう。

（井上 親雄）